

第8回 渡川流域学識者会議

議事録

平成31年2月7日（木）

13:30～17:20

中村河川国道事務所別館2F 会議室

1. 開会

○事務局（国土交通省）：只今より、第8回渡川流域学識者会議を開催します。本会は、河川整備計画の進捗状況を確認して頂くための現地調査です。

2. 開会挨拶

○事務局（国土交通省）：委員の皆様には日頃より国土交通行政、とりわけ渡川水系の河川改修、環境、ダム整備の推進にあたってご協力を頂きまして御礼を申し上げます。昨年7月の豪雨では渡川水系では幸いにも大きな被害はありませんでした。しかしながら宿毛市、大月町、愛媛の南予地方では甚大な被害が発生し、中村河川国道事務所、中筋川総合開発工事事務所ではテックフォース派遣、土砂撤去等の被災地支援に全力をあげてまいりました。このような中で、地域の安全安心のために、平成27年度に策定した渡川水系河川整備計画をより一層推進いたしまして、地域の安全安心、生命財産を守っていきたくと考えております。7月豪雨によりその必要性を認識した次第です。昨年度は河川整備計画の事業再評価として、四万十川の直轄河川改修事業、環境整備事業、中筋川総合開発事業につきましてご審議いただいたところです。今年度は進捗中あるいは完了予定箇所の現地を見て頂きましてご意見、ご指導頂ければと思っております。

3. 委員紹介

○事務局（国土交通省）：〔配付資料確認、出席委員の紹介〕

4. 現地調査箇所説明

○事務局（国土交通省）：〔現地調査要領の説明〕

○笹原議長：現場視察の時間の関係で、意見交換はかなりタイトなスケジュールになると思われます。各委員からは、のちほど実施する意見交換の時に、所見を頂くようにしたいと思います。

○木下委員：スケジュールに「実崎のワンド」は行かないようになっているが、是非見たいです。

〔現地スケジュールを変更して「実崎のワンド」を追加することとした〕

5. 現地調査

- ・実崎ワンド箇所（環境整備事業）（国）
- ・初崎箇所（河川改修事業）（国）
- ・具同入田箇所（河川改修事業）（国）
- ・ヤイト川箇所（河川改修事業）（県）
- ・横瀬川ダム箇所（ダム事業）（国）

6. 意見交換

○笹原議長：現地調査結果の取りまとめに入りたいと思います。所見を述べていくことにしたいと思います。簡潔なご発言をお願いします。箇所ごとに進めていきたいと思います。

（1）初崎箇所

○張委員：特殊堤を建設することで、洪水や津波に対する安全性は高くなると思うが、住民の意識も大事である。堤防設置で安全性は高くなるが、万全になるということではない。計画を超えた洪水や津波が発生した場合は、被害がひどくなる可能性もあるので、住民にも想定外の外力が発生した場合の意識を持ってもらう事も大事である。レベル2の洪水、津波が発生した場合は、これまでよりも逃げにくいと思うが、（国において）避難経路の整備は考えていますか。

○事務局（国土交通省）：現地に避難タワーがありますので、津波時は、地区でタワーに逃げるようになっています。特に、国で情報提供している避難経路はありません。

○笹原議長：地域の防災計画の話になりますので、この会議だけでは問題解決しないと思います。その意識で地元との議論を進めていけばいいと考えます。

（2）実崎箇所

○木下委員：用語の訂正があります。資料に「塩分濃度」と書いてありますが「塩分濃度」という用語はありません。「塩分」です。それと、塩分の季節変化の図ですが、汽水域のところ塩分が33というのはありません。恐らく機械の不調と思われるので、チェックをお願いします。もう一つ用語ですが、現在「パーミル」は使いません。「塩分」は単位無しで使います。あと一番問題なのは塩分が5以下のところは8月1日、8月20日の前後に2回起きている。再三、言ってきたが、このような場所にいくら移植してもコアマモ場は形成されない。これが大きな理由で、干潮時に海水がひいた場合、塩分が5なんて場所には、コアマモは移植したときは出来たような気がしますが、絶対に持続性はない。私は、長年やってきたが、どんなに塩分が下がっても15はないとコアマモは生息できない。大いに再検討の必要がある。このまま人工的なワンドを維持して、コアマモ場の形成を目指すなら、かなり検討する必要があります。その際は相談にのります。

(3) 具同入田箇所

○橋本委員：きれいな堤防ができ、幅広く、安心できるようになった。また、今年は落ちアユが大量に獲れています。ここに10年前の新聞の切り抜きを持ってきていますが「四万十川の下流、アユ復活願い瀬作り進む」という記事です。河原の樹木伐採という形で10年前に実施していました。その関係もあり、大きくアユが増えたのだと思います。入田地区としてはそう思っておりますが、国交省はどのように思いますか。

○事務局（国土交通省）：平成21年度から樹木伐採を実施しており、平成26年から砂州の切り下げを行っています。モニタリング調査も行っています。我々は、早瀬の再生を目指して樹木伐採、砂州の切り下げを行っていますが、年により洪水の規模も異なり、河口からのアユの稚魚の量も、年によって異なるというのものもあるのかなと考えています。樹木伐採、砂州の切り下げの効果であることを期待したいのですが、落ちアユが増えたのが、すべて、事業の効果というところまでは検証が出来ておりません。慎重に河川を取り巻く環境を見ながら事業を進めていきたいと思っています。

○木下委員：毎年アユの調査を行っているが、四万十川の河口域、海で分布している仔魚は昨年より、約100倍になっている。アユの仔魚の密度が高くなってきたのは、昨年からその傾向がある。産卵場造成と多少なりとも関係があると思われる。産卵場は、昔は赤鉄橋より下流に、多くの産卵場が形成されていたが今は一切ない。恐らく、大潮の満潮時に潮が来ることが影響していると思われ、四万十川のアユが激減したのは、産卵場が大きく縮小したことも一因であると考えられる。赤鉄橋下流の不破地区の塩分について数十年間の年変動データがあれば示して頂きたい。

○岡田委員：樹木伐採、砂州の切り下げと、アユの産卵場の広がりについて調べた結果、大窪の産卵場が広がったのは、樹木伐採によって洪水時の流れが変わり、そこに瀬が出来

るような状況ができて、さらに地元や国土交通省が、維持してきたことが要因だとわかってきました。流れや土砂の動きからも説明がつきましたので、関連性はあるはずですが、もう一つ、現在、出水のたびに土砂が下流に移動しており、赤鉄橋のすぐ上流にも瀬が見える形になってきており、塩分の状況もありますが、まもなくすると赤鉄橋を越えて瀬が出来る可能性があると思います。

○笹原議長：具同入田箇所に限らず、樹木伐採等のアユに関係するところは今までも調査されているが、これからも継続的に学識者等の意見も聞きながら、調査を進めて頂ければありがたいです。

(4) 相ノ沢内水対策

○岡田委員：地域の方が早く避難し、車等を安全なところに移動させることは、非常に大切である。水位の情報を早く確認し、地域の方にも、理解し活用して頂く必要がある。7月の豪雨を受けて四万十市、中村河川国道事務所の協力の下、高知工業高等専門学校で四万十市の住民に大規模なアンケートを実施しています。豪雨時の防災情報をどれだけ入手し、活用されているか等のアンケートです。すでに2,000ほど返ってきています。幅広い年齢層に行っているのも、データがまとまり次第、公表し、住民にもそういったものの活用の仕方を説明できるような場を、作って頂きたい。

○笹原議長：事業者から説明があった、これから実施するハード対策は、河川改修に係る箇所の整備が主となっています。内水対策で大事なものは、住民の方の自助努力であり、浸水防止壁や宅地のかさ上げをいかに進めていくかということところです。国や県任せだけではなく、市町村含めての地元が、個人の努力を含めた総合的な対策を勧めるための方策を、行政の方に考えて頂きたい。住民意識向上は、避難だけでなくハード対策も絡んでいるかと思っています。時間はかかりますが、粘り強く進めて頂きたい。

(5) ヤイト川箇所

○石川委員：過去からの写真資料を見ると、2年程度で河道内にいい具合に植生が繁茂し、流れに変化が出ている。現在、河道内は、重機等の走行のためつぶれているが、今後落ち着けばまた回復すると思われるので、その後のメンテナンスも必要と思われる。可動式堰堤に魚道（計画）がある。上下流を行き来する魚種は見られないとの現地説明であったが、ヨシノボリ、エビ、カニの生息の可能性がある。魚道の仕切り板が高いため、水位が低いときは機能しない可能性があり、生物に対して優しい川を取り戻すのであれば、マスの中に石を入れる等、工夫が必要。またモニタリングを行いながら様子を見ていく必要がある。

○張委員：固定堰を可動堰に変更することで、流量の調整も可能になり、調整方法によって川の地形、環境も変化するので、堰の調整方法の検討も必要と思われる。

○松本委員：農業用の利水の観点から見ると、堰を統合し可動型に変える改修は、地元、土地改良区との共同作業になり、堰が完成後、土地改良区に移管されると思う。移管後も改良区に任せっきりでなく、堰本体に関しても維持管理が大変になり、土地改良区に対しての責任も大きくなるので、魚道の完成後のモニタリングと同様に、利水、治水の両方の観点で完成後、適切に管理されているかを注視して頂きたい。

○笹原議長：堰は河川を横断する構造物であり、河道形状にも影響を与えるということなので、モニタリングは必要と思われる。引き続き検討お願いします。

○木下委員：魚道に関しては堰を往来する魚、生物を正確に調査した上で、設置するべきと思われる。

○笹原議長：県は魚道整備に大変ご努力されている。魚道は課題の多い構造物と思われるので委員の提言を熟考する必要がある。

○笹原議長：厳しい意見もありますが、まずモニタリングを行い、その結果を見た上で、将来像を決定することを、今後考えていく必要がある。

(6) 横瀬川ダム

○橋本委員：試験湛水が平成31年度からになっているが、稼働するのはいつ頃の予定か。

○事務局（国土交通省）：事業自体は、平成31年度完成を目指して実施している。完成と同時に管理に入り、実稼働に移行予定となっている。具体的には、平成32年度の洪水期からは実稼働に移行し、効果を発揮すると考えている。しかしながら、試験湛水期の降雨の状況により、今年程度降雨がなければ、貯水出来ないことも考えられる。

(7) その他

○木下委員：本日は河口域には行かなかったが、一番懸念しているのは高知県が遂行している四万十川本流と竹島川を隔離して竹島川を海に抜く計画。四万十川が本当に大事であるのであれば、再度慎重に検討して頂きたい。アセスメント結果にも、計画を実施した際には竹島川に大量に海水が浸入し汽水域がほとんどなくなり、シオマネキ、アマモ場はほぼ壊滅するとなっている。慎重な検討をお願いしたい。

○笹原議長：国交省、県によるいわゆる渡川の事業という観点で言うと難しいところが有るかもしれませんが、委員の今の意見が検討の場に、再度届くように、是非ご努力をお願いしたい。

○岡田委員：スジアオノリの今年の状況をお聞きしたい。

○事務局（国土交通省）：先月末からモニタリング調査を実施しており、現場状況は把握中だが、四万十市の情報によるとかなり付きが悪いと聞いている。下流漁協組合からも水温が下がったが、今年は付いてないと聞いている。モニタリング調査の結果は、また報告し

ます。

○張委員：ダム容量を確保するための工夫はされていますか。

○事務局（国土交通省）：計画上は730万トンの総貯水容量です。現在、水がたまっていない状態で測量を行っており、容量を確保できるか確認し、できないところは掘削する予定。しかし、今のところ容量は確保できている。工事のために盛り上げた箇所等は、工事終了後、元の形に復元予定です。堆砂容量は、計画では今後100年で30万トンとなっています。近隣の中筋川ダムは、建設後20年経過しているが計画堆砂の進行が非常に緩やかで予定をかなり下回っている。若干地質、地形が異なるため一概に比較できないが、計画を超える堆砂はないと考えている。また堆砂が進んだら、堆砂排除を行う予定です。

7. 閉会挨拶

○事務局（国土交通省）：本日の渡川流域学識者会議、長時間にわたる現地視察、貴重な意見交換ありがとうございました。頂いたご意見は十分留意しながら、今後の事業に反映していきたいと思っております。最近、大きな激甚災害が全国各地で発生しているが、昨年7月に高知でも宿毛市ではかなりの降雨があったが、中筋川ダムにあたっては洪水調整にも至っていない。狭いエリアでの降雨であったためであるが、逆に降らなかったことによる危機感も抱いている。昨年の災害を踏まえて、政府で強靱化予算も組まれており有効に活用しながら治水対策、環境対策を推し進めて参りたい。本日はありがとうございました。

8. 閉会

○事務局（国土交通省）：以上で、第8回渡川流域学識者会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。